

## コメント論文：審査意見に対するリプライ

小倉康嗣 早稲田大学人間科学部，東京情報大学総合情報学部，聖心女子大学文学部  
Yasutsugu Ogura Waseda University, Tokyo University of Information Sciences, University of the Sacred Heart

審査者の先生方には、必ずしもなじみのある領域ではない本論文を、本当に丁寧に読み込んでくださり、また真摯な審査意見をいただき、誠にありがとうございました。

「規約」にしたがい、旧原稿の審査意見に対する筆者の応答を論文に含める形で修正を行いました。審査意見に対してどういう視点から修正を行ったのかを簡単に説明しておきます。

### 「審査意見④ 生成的感受概念、個人誌的アプローチについて」に対して

著者が「高齢化社会における人間形成の存在論的基盤を探索していく試み」において、Beckら(1994)の「再帰的近代化」論を基礎にしながら、これまでの「産業主義的で適応主義的な人間形成観そのものが問い直されてくる」という認識に立ち、「加齢プロセスそのものにとらえ直し」と同時に、「人間形成の新たな位相を支え根拠づける基盤」をも再確立しようとする意図をもって本論を構成しようとしていることは理解できるし、それは現在の心理学でなされている多くの実証的なエイジング研究に対する批判的な視線に裏付けられていることに対して、審査者も共感を覚えるところである。それらは理論的な宣言としても妥当なものであり、この点

について本論文の著者が関連領域の理論を高度な水準で自分のものとしていることは、本論文から充分にうかがわれる。

評価が分かれるのは、前半の理論的言説と、後半部のケース分析との関係についてである。著者は、両者を「生成的感受概念」および「個人誌的アプローチ」によって連結しようとしている。この点について審査者の一人はつぎのような問題を指摘している。

「前者の理論的言説は、何らかの現実を解明するための言説というよりスローガンあるいは著者の価値判断の宣言に感じられる。また、後者の3人の言説がなぜ選択されたのか、社会学的な背景が今ひとつ釈然としない。「隠居」という思想を意識的に選択している人たちが、現在社会におけるどのような人たちを代表しているのか、伝わってこない。「隠居」と意識化しなければ「隠居」がないのか、「隠居」を意識せず生きている人たちがいるのか、生活年齢と関係なく20歳で「隠居」もあり得るのか、基本的な構図が描かれていない。また、自己の価値を裏付けするためにデータを利用しているだけに感じられる面もある。現場から新しい仮説理論を形成しているという姿勢が今ひとつ感じられない。」

著者が述べる「生成的感受概念」とは、理論概念そのものを生成するというよりは、基本的な方向性はすでに理論的に措定しながら、それが現実としてどのような現われを見せるか、具体的にはラディカル・エイジングのテキストとして既に位置づけられた3人の「隠居」生活者の語りにおいて、隠居生活の意味が、どのような「表象」として現れるかをとらえ、そこからの概念化を進めることをさしていると思われる。

著者は、考察部において、「離陸の文脈」「浮遊の文脈」「着地の文脈」という表現を導き出しており、それぞれ「社会から外れる」「自然（じねん）」といった素朴な概念を用いた説明づけを行っている。これらの具体的な表現を獲得したという点で、「生成的感受概念」としての性質があるにしても、解釈の本筋はすでに問題部で先取りされていたのではない。その点で、何がどのように「生成的」であり、「感受」された事柄なのか、という疑問が残る。この点が、本研究を「質的心理学」の文脈で評価しようとするときに起きる難点の一つである。

まず、ご指摘にあった「前半部の理論的言説と、後半部のケース分析との関係」については、「1.2 『生成的理論』の構築というメタ理論的構図」というセクションを新たに設け（旧原稿の1.2を全面的に書き改め）、両者の関係をメタ理論のレベルから明示化すべく、その方法論的構図の説明を行いました。そして「2. 視角と方法——調査問題の構成」および「3. フィールドの理論的選定と調査概要」を、1.2で説明した方法論的構図に沿ったかたちで書き換え、さらに結論部の「6. おわりに」において、後半部のケース分析で得られた知見が、1.2で説明した方法論的構図においてどう位置づけられるのか、説明を加えました。基本的にはこれらの修正部分に、審査意見①（さらには②）に対する応答が含まれています。

これらの修正の要諦は、「本研究の方法論的（メタ理論的）構図が、意味解釈法を方法理性とする『生成的理論』の立場に立っている」ということを明確にしたことにあります。それを踏まえたうえで、「何がどのように『生成的』であり、『感受』された事柄なのか」というご指摘については、つぎの3つの点からお

答えできると考えています。

まず第1に、メタ理論的なレベルで述べますと、本研究の目的は、「反証不可能な存在」（仮説演繹法）や「検証可能な存在」（観察帰納法）を「実証」することではなく、理解科学の立場から「了解可能な存在」（意味解釈法）を「完成」させていくことにあります。したがって、その方法論的構えにおいて、理論の立て方そのものが「生成的」態度をとっているということがいえます。視角としての〈ラディカル・エイジング〉も、そのような方法的態度において構成されたものです。また生成的感受概念としての〈再帰的社会化〉も、人間形成に関する「一般像」を解明する概念ではなく、あくまで変化の「兆し」を感受し、その社会的意味を解釈して了解可能な存在へと完成（生成）させていくための方法的概念として構成されたものです。つまり本研究の理論動機は、感覚所与としての存在（すでにそこにある現前としての経験）を解明していく「実証科学的な接近」ではなく、意味の存在（いつかどこかに現前する経験）を完成（生成）させていく「設計科学的な接近」（吉田, 1997）にあります（なお、その方法論的構えを採用することの根拠については、論文の第1節において説明していますので、そちらを参照してください）。「認識装置が新たに開発されてはじめて、既存のそれになかったリアリティが取りだせる」（今田, 1986: 28）のであり、そういった方法論的な意味で「生成的」であると考えます。

第2には、このような認識装置の開発によって新たに「感受」された事柄（リアリティ）こそが〈意味の根源的基層〉であり、さらにそこから再帰的に立ち上がる〈超越的地平〉である、ということです。これらのカテゴリー（存在）は、前半の理論的考察部分では全く先取りできなかった事柄です。前半部で準備した認識装置が、〈個人誌的アプローチ〉によってライフストーリーという臨床の世界に触れてはじめて見出すことができた事柄であります。そしてこれこそが、論文の前半部で設定した課題に対する答えになったわけです（そもそも、本研究で「感受」したかったことは、〈再帰的社会化〉の「具体像」ではなく、その存在論的「基盤」は何なのか、でありました）。

第3に、「離陸（超社会化）の文脈」「浮遊（非社会化）の文脈」「着地（再社会化）の文脈」のダイナミ

ズムについては、その解釈の本筋がすでに前半部で先取りされていたのではないかと、というご指摘がありました。しかしながら、もし仮にそうであったとしても、「生成」の別な局面があると考えます。「生成的理論」の提唱者である社会心理学者 K. ガーゲンも指摘するように、データは、抽象的な言説形式をとる理論に具体的な解釈を与え、相互主観的妥当性（客観的事実ないし感覚所与としての妥当性ではなく）を高めるものでもあります。つまり、当事者視点を研究者言語で表現する作業だけではなく、研究者視点を当事者言語で表現し、理論（科学的世界）と現実（生活世界）を含めたトータルな世界における相互主観的妥当性を問うことによって新たな理解を完成させることこそ、設計科学的な理論の社会的実践性であり、「生成」であると考えます。

また、「前者の理論的言説は、何らかの現実を説明するための言説というよりスローガンあるいは著者の価値判断の宣言に感じられる」というご指摘がありましたが、これについては、「生成的理論」というメタ理論的構図（そして意味解釈法という方法理性）を採用する場合、むしろ積極的に立場表明を行う必要があると考えます。なぜならば「生成的理論」が経験科学としての妥当性を獲得する手続きは、「批判的討議」（＝現実の社会的構成をめぐる対話と議論）に求められるからです（その論理については、論文 1.2 の後半部分で詳述しているので、そちらを参照してください）。その場合、どういう立場（認識的・理論的・概念的構え）から解釈を行ったのかを明示しておくことが、本研究の解釈行為を批判的討議に開くために、決定的に重要になってきます。K. ガーゲンも、理論も研究もことごとく社会的実践としての価値を担っており、知の社会的構成それ自体をも考察の射程に入れることの重要性を指摘しています。すなわち『『物-心パラダイム』との決別は、研究の価値中立性の否定をも意味する。理論が、決して、客観的・外在的事実の反映ではなく、研究者という身体をも含んだ共同主観的・間身体的な世界の構成プロセスの一契機だとすれば、研究者にとっての価値は、否応なく、理論の中に反映されざるをえない。理論化とは、必然的に、特定の価値を担う、世界の構成プロセスなのである』（Gergen, 1994=1998 : 294）。したがって立場表明を明確に行う

ことによって、理論や研究そのものが担う価値的側面を自覚的に批判的討議に開いていくことが、「生成的理論」の立場からアプローチしていく場合に必要であると考えます。

しかしながら旧原稿では、どのような方法理性に依拠しているのかを明確には記述しておらず、そのメタ理論的構図に関する説明が不十分でした。そのため解釈や価値表明的言説が先走っている印象を与えてしまっていたこととはご指摘のとおりだと思います。したがって冒頭で述べた箇所に方法論的構図の説明を大幅に加え、それに伴った論文全体の修正・再構成を行ったしだいでです。

『質的心理学研究』は、ポストモダン思想が論理実証主義につきつけた批判を受け止めたあとで、「では、そこからどこに向かえばよいのか」という、現在の人文社会科学が直面している最も重要で困難な問題を果敢に模索できる「場」であると、私は思っています（この問題を認識論的に議論できる場はあっても、具体的な「作品」としてそれを模索できる「場」（学術雑誌）は、いまの日本には他にないと思います）。そんな思い入れを込めて、本論文を投稿したしだいで。

#### 「審査意見② 『隠居』という結節点の選定について」に対して

また、先に引用した審査者の文にあるように、本論文を読んで受ける印象として、理論が広げる問題領域の広さ・深さと比べたときに、後半部の分析対象となる「隠居研究会」とその中の3名という協力者の選定が、高齢化社会全体をとらえ得るテキストとなることへの説得性が充分ではないように感じられる。著者は、本論文で画定された視角と方法に基づいて調査問題を探索していくときの「結節点となるトピック・エリア」として「意味感覚としての隠居」を取り上げることを明示している。そのことが、先の審査者の疑問にあるように「自己の価値を裏付けするためにデータを利用しているだけに感じられる」のではなく、本著者が本意とする「再帰性」に立ち返って、理論的命題に対峙する現実への「参入」であると主張できる理由は何なのか。

さきにも説明した本研究の方法論的（メタ理論的）

構図からも明らかなように、「隠居研究会」とその中の3名という協力者の選定は、「高齢化社会全体をとらえ得るテキスト」として選定したものではありません。「既存の意味体系からの差異＝意味」を担った対象として、「再帰的近代としての高齢化社会」という歴史的社会的状況において、変化の「兆し」や「ゆらぎ」を表す例外事象（カオスの縁）として選定したものです。

本研究の理論動機である「生成的理論」においては、社会の再編期において自明視された現実を問い直す契機（ここでは「中年の転機」と〈意味感覚としての隠居〉）を重視し、既存社会には存在しない、可能態としての新たな現実の存在様式（変化の「兆し」）に対する問いが主題となります（本論文では「人間形成観への問い」がそれに相当します）。

論文の1.2でも述べましたが、既存の制度や価値のもとで適切に社会運営ができない変革期には、社会を新たに構想し直す新たな意味の模索が先行します。ここにいう「新たな意味」とは、既存の意味体系（人間形成観）からの差異化です。社会の変革期にあらわれる、人間存在の意味の問い直しや新しい社会イメージの模索などの試みは、意味の自省作用（reflexion）としての構想力に依存しているといえます。したがってこの場合、例外事象の研究法がきわめて重要になります。なぜなら、そこでは個別・特殊な事例（例外事象・特異事象）の中に、既存の制度からの差異化と変化の「兆し」を読みとり、差異を既存の意味体系の中に作用させ、差異（意味体系）からの差異を解釈する営みとしての自省作用が問題となるからです（そしてこの方法は帰納や演繹論理の埒外にあり、解釈領域の問題です。だからこそ、例外事象を選んでその意味の存在完成を試みる意味解釈法の独自性があるといえます）。

ただし旧原稿では、以上のような対象選択における方法論的意図や手続きが明確には説明されていませんでした。よって「3. フィールドの理論的選定と調査概要」において、現代日本における「中年の転機」と〈意味感覚としての隠居〉とが交差する地点を「意味を担った対象」として選定したという、対象選択の構図の説明を、1.2で明らかにした方法論的意図を織り込むかたちで付け加えました。

### 「審査意見③ 『質的心理学』の『心理学』という共同性への配慮」に対して

本研究をわれわれ基本的には心理学に属する審査者が読み、評価しようとするときに感じる難しさの一つは、ここで参照枠となっている文献や理論群が、心理学ではなじみの薄いものである点である。もちろん「質的心理学」はこれまでの堅い枠を壊そうとする姿勢から生まれたものであって、既存の枠組をここに適用しようとは思っていないことは理解していただきたい。その上で、本論文に付いている長い脚注が、社会学領域の研究者を意識した内容となっているように思われることを指摘しておきたい。学術雑誌が、一種のコミュニティをつくり出すためのメディアであることを考えると、どのような読者が想定されるのかを考え、その人たちの共同性に向かってアドレスされた内容を選択することが、編集作業の一環をなす。この問題は、著者が本論文の「社会化」論において批判的に論じているように、どのような社会に向かっているの適応を促すかという、雑誌が共有するコミュニティの規定そのものを含んでおり、むしろそれ自体を拡張する試みとして本論文をとらえることも可能である。その上で、社会学ではなく、心理学というコミュニティ、それを開いたものにしていくための提案として本論を構想するならば、おのずと書き方に違いが出てくるのではないかと考える。具体的には、用語法において、また脚注などに見られる参照枠の想定において、社会的な学術概念としての厳密性を抑制して、審査意見①の観点に関わるような「感受性概念」に重きを置くような再構成ができないだろうか。

私は社会学をバックグラウンドとしており、本論文で使用している概念や引用文献の多くが、社会学を出自としていることは否めません。しかしながら「質的な研究とは、あらゆる科学的な研究の原点、学問の原点に立ち返ることを意味している」（麻生、2002：165）という（私自身も最も共感する）点において、共有可能で、しかもきわめて重要であると考えた概念

や内容をもってきたつもりでおります。

また、不案内な心理学の概念を知ったかぶりをして無理に使うよりも、記号表現としては社会学的概念かもしれないけれども、記号内容において心理学が抱えている問題と共有でき、私自身としても理解を深めている概念を使って議論の場に解き放つほうが、学問的姿勢として（そして「学問の原点に立ち返る」という意味においても）誠実であるという考えもありました

（また、貴雑誌への投稿を考えた当初、2001年5月7日付で「規約に『心理学のみならず、……他領域の研究や学際的研究も歓迎する』とありますが、額面どおり受け止めてよいのでしょうか。私は社会学を専攻していますが、文章表現や参考文献等において、社会学をディシプリンにした論文でも、問題ないでしょうか」という文面の質問メールを編集委員会事務局にお送りした際、「社会学でも（他の学問でも）歓迎します。額面通りにお受け取り下さい」とのお返事をいただいていたということもありました）。

ただし、ご指摘いただいたとおり、とくに脚注において、社会学的な学術概念としての厳密性を追究しすぎていると考えられる箇所がありましたので、それらを削り、その分、審査意見①②に対する応答において説明したような、質的研究にかかわる方法論的な議論に重きを置くように再構成しました。また純粋に社会学的な概念については、可能なかぎりの説明を加えました。はなはだ不十分かもしれませんが、これら修正によって、できうるかぎりの配慮を行ったつもりです。

## 補注

審査意見①②の応答における方法論的言説は、その多くを今田（1986）に負っています。

## コメント論文における引用文献

麻生武. (2002). あとがき——心の解放記念日. 質的心理学研究, 1, 165-166.

Gergen, K.J. (1998). もう一つの社会心理学——社会行動学の転換に向けて (杉万俊夫・矢盛克也・渥美公秀, 訳). 京都: ナカニシヤ出版. (Gergen, K.J. (1994). *Toward Transformation in Social Knowledge*, 2nd ed., London: Sage.)

今田高俊. (1986). 自己組織性——社会理論の復活. 東京: 創文社.

吉田民人. (1997). 二つの相互循環——社会学的認識の基本特性. 三田社会学, 2, 22-36.

## 編集委員会からの補足

このコメントは、本来は小倉さんが編集委員会へのリプライとして書かれたものである。小倉さんをお願いしてコメント論文として公表させていただくのは、以下の理由からである。1) 小倉さんと編集委員会との「対話」プロセスによって、両者の「質的心理学」にかける真摯な意気込みや意図がわかり、「質的心理学」の発展に役立つ。2) 専門用語を共有していない心理学者には、小倉論文を理解するための解説として役立つ。3) 心理学以外の専門領域の研究者が「質的心理学研究」に投稿されるときに参考になる。